

リスクマネジメント上で
毎期、安定的に確保する目
標利益を設定すれば、その
目標利益を確保するために
赤字事業の赤字幅の圧縮と
黒字事業の黒字幅の拡大が
必要になる。

黒字事業の代表格は信用
事業である。利益は調達と
運用の差の資金収支によっ
て生まれる。運用利回りが
一定なら調達コストを下げ
れば資金収支は拡大、利益
は増加する構図だ。

運用利回りは、預金や有
価証券、貸し出しといった
運用資産のうちのどの資産
が運用利回りの拡大に有利
か、アセットアロケーション

職場のマネジメント

⑧

ン(適正な資産配分)を指
向することによって変わって
くる。

J Aではこれまで貯金の
金額、貸し出しの残高など

目標利益と信用事業

益を維持するた
めには、何が利
益を維持するた
めには、何が利

経営効率の向上が鍵

「残高ありき」で事業を進
めてきた。しかし、目標
は、利益水準の確保で残高
ではない。最終的に重要な
のは利ざやであり、資金収
支である。

キャンペーンで金利を高

くすれば当然、貯金は集ま
る。しかし、調達コストは
増大する。運用面でも信用
の奨励金が下がれば、預金
の資産としての有利性は低
下する。同じ収

の奨励金が下がれば、預金
の資産としての有利性は低
下する。同じ収

の奨励金が下がれば、預金
の資産としての有利性は低
下する。同じ収

益を維持するた
めには、何が利
益を維持するた
めには、何が利

ざやや資金収支にとつて有
利なのかを自ら選択するこ
とが必要である。

実際にJ Aで、あまり貯
金キャンペーンも行わな
ったため、貯金は現状維持
にとどまったが、運用で有

価証券のポートフォリオ
(事業構成)の見直しを対
策として実施、調達が低下
したことで運用利回りを上
げたことで資金収支を1億
円程度改善した例がある。

また、収益とリスク量を
対比することでリスクを最
小に抑え、収益の最大化を
指向することも可能になっ
てくる。

また、収益とリスク量を
対比することでリスクを最
小に抑え、収益の最大化を
指向することも可能になっ
てくる。

の拡大が図れるのか対策を
講ずることで収支は大幅に
改善するはずである。一
方、収支を確実に拡大する
にはリスクテイク(危険を
冒すこと)も必要になる。

加島徹
(JA総研主任研究員・
加島徹)

(次回は15日付)